地球回転に関する国際シンポジウムの報告

奥　田　豊　三*

去る5月9日から15日に至る1週間，IAU Symposium No. 48, "Rotation of the the Earth" が岩手県盛岡市を主会場として開催された．これは日本の天文学者にとっては最初の国際学術集会であったが，関係各方面から寄せられた絶大な援助，協力によって，滞りなく成功裡に終ることができた．

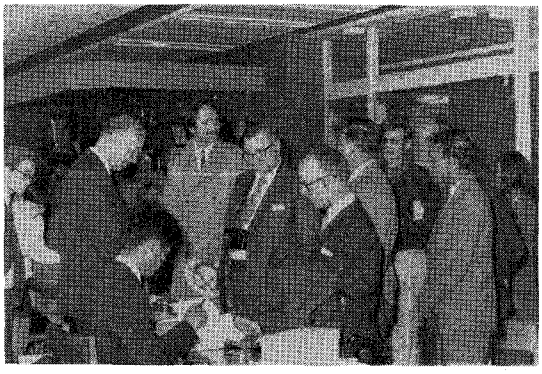
今回のシンポジウムの性格については，昨年の本誌第63巻第10号で紹介したが，1967年にイタリアのストレーザで開催された"大陸移動および極の永年変化"に関する国際シンポジウム以来，極運動および自転速度変動を含めた地球回転運動の問題が天文学および地球物理学に共通のものとして急速に展開してきたので，これに関心を持つ各領域の研究者が一堂に会して総合的な検討を進め，固体地球の解明と極運動および地球回転をより精密に決定する方法を見出すという趣旨に沿って，この度のシンポジウムが開催された．この間僅かに4年を経過したにすぎないが，その間には地震学の新しい転位理論の開発に伴う大地震と極運動との関連についての研究とか，新しい技術開発に伴うレーザーによる月や人工衛星の測距，人工衛星のドップラー観測，長基線電波干渉法などによる新しい観測研究の体制が次々と脚光を浴びて登場し，今回のシンポジウムでもこれらの成果が発表された．

各領域における研究発表は当初予想をはるかに凌駕し，国内組織委員会としては時間配分に苦労をしたが，今回のシンポジウムの意義の重要性を再認識した次第である．予定会期が限られており，且つ遠来の参加者に発表の優先を与えるために，国内の発表者の一部には資料配布だけにして頂いた方もあり，誠に申訳ないと思っている．

シンポジウムでは H. ジェフリス卿および P. メルキオール教授による招待講演の外62編の研究発表と19編の資料配布とがあり，終始熱気のこもった質疑討論がなされたほか，各種委員会，PSTに関する特別集会，緯度観測所見学等もあり，最終日には既設の天文観測機器の拡充強化をうたい，これに新しい観測法の導入をはかることによって惑星地球の内部構造研究の推進についてなど5項目の決議を行なって全日程を滞りなく終了した．この間リセプション，エクスカーションが行なわれ，これに加えて同伴家族に対する多彩な行事もありで，国際的親善の実も大いにあがったと思う．

国際天文学連合，国際測地学および地球物理学連合共催の今回のシンポジウムを盛岡で開催するに当って，文部省，学術会議，地元岩手県，盛岡市，水沢市の公共機関は勿論，日本天文学会，日本測地学会からは物心両面にわたる援助を頂いており，ここに深い感謝の意を述べると共に無事終了できたことを御報告申上げる．またシンポジウム運営経費の不足解消に御尽力頂いた日本学術振興会，上記2学会ならびに快く募金に応じて頂いた各界の方々には心からの謝意を表する．

シンポジウムの成果は研究集録として出版すべく，現在鋭意その準備を進めているが，できるだけ早く完了して公刊したいと考えている．



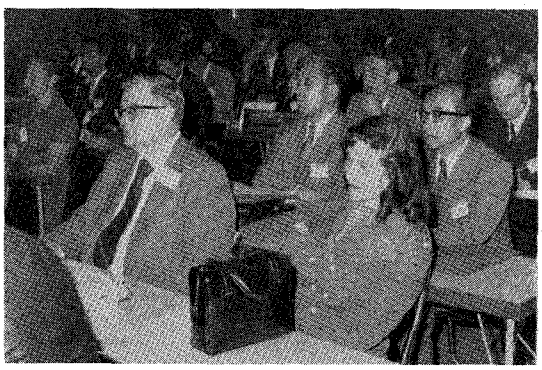


写真　上は盛岡グランドホテルにおける受付．
下は開会式でのスナップ

* 緯度観測所
T. Okuda
IAU Symposium No. 48, "Rotation of the Earth"